

「きぬむすめ」の高品質良食味栽培法

「きぬむすめ」は県内の栽培適地が広く、良食味で、生産者・実需者の評価も高い。そこで、良食味、高品質を維持しつつ安定した収量を得るための栽植密度、施肥法について検討した。その結果、極端な疎植を避けて、窒素成分で基肥4kg/10a＋穂肥2kg/10aとすることで、高品質安定栽培が可能である。

内 容

「きぬむすめ」栽培の目標を、収量540kg/10a、玄米タンパク含量7%未満（7%以下が県の良食味基準値）かつ検査等級1等として、栽培法を検討した。

栽植密度の検討では、疎植（15.2株/㎡）、密植（21.2株/㎡）とも、収量に差はなく、検査等級は1等、玄米タンパク含量は7%未満となった（図1）。1㎡あたりの籾数は、一穂の籾数が増加したことで、疎植が密植より多い傾向を示した（図2）。

施肥法の検討では、基肥を施用すると穂数が増加し、穂肥により、また窒素施用量が多くなると収量、玄米タンパク含量及び1㎡あたりの籾数が増加した（図1、2）。ただし、穂肥量4kg/10aでは食味総合値（試食官能調査によるおいしさ）がやや低下した。

以上の結果から、「きぬむすめ」は基肥を窒素成分で4kg/10a施用して穂数を確保し、穂肥を2kg/10aとすることで籾数が適量確保でき、安定収量、

品質良好となり、玄米タンパク含量も7%未満に抑えられた。しかしながら「きぬむすめ」は、一穂籾数が多くなる特性があり、過剰な籾数（35,000粒/㎡以上）は、デンプンが籾に十分行き届かないため、未熟粒の増加等、品質低下につながる懸念がある。疎植の場合には密植に比べて籾数が増加することから品質低下のおそれがあり、その防止のために極端な疎植は避ける。

今後の方針

「きぬむすめ」が高品質・良食味、安定多収な品種として普及・定着できるよう、栽植密度、基肥・穂肥の施肥法に加えて、省力化も考慮した緩効性肥料の施肥法の検討を行うとともに、栽培上の留意点、施肥基準を含めた良食味栽培マニュアルを作成、普及する。

松本 純一（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790 - 47 - 2410）

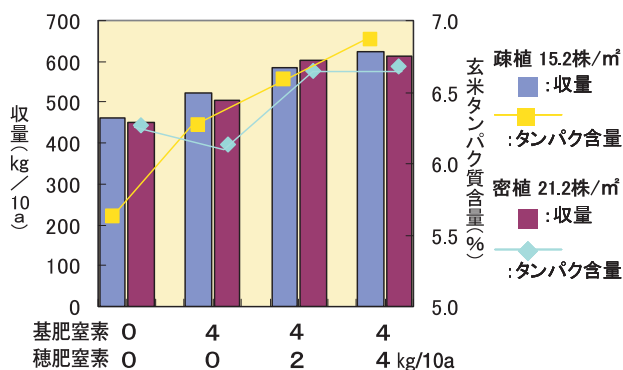


図1 栽植密度と施肥量が収量、玄米タンパク含量に及ぼす影響
玄米タンパク含量は水分14.5%補正

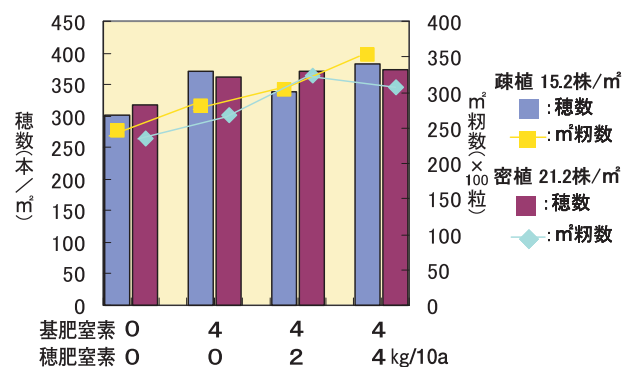


図2 栽植密度と施肥量が穂数、籾数に及ぼす影響
（代表株調査）
玄米タンパク含量は水分14.5%補正